



毎月一日発行
発行所
宗像大社
福岡県宗像郡玄海町
電話 神保 26番
定価 一年 送料共500円

宗像大社御用達
祭具 装束
松島神輿製作所
京都市下京区北小路通新町西入
電話 八八八九番
振替口座京都一五八九二番

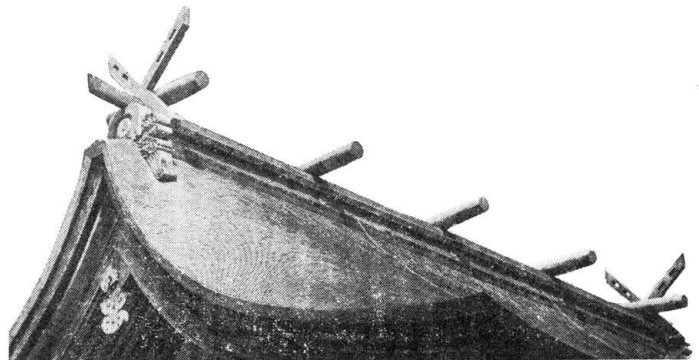
大島の地下資源調査
女島嶼に開発、大島の地下資源を調査、島の発展を計りたい。この目的で、県通産部地質資源開発調査団一行が島を訪れ、二月二十一日、一行は調査

宗像大社献詠歌会詠草
二月六日 於社務所詠草到着順
村山田 吉田佑市郎
孫崎が好むアリの海園歌集に
はかす毎日つき
田熊 小野角次郎
成人の佳き日にたな園園書券
招く部屋生会の歌
名 名 竹原 円
逢いて我が待たきこほま
一ましたためたれ何れか
福高 高橋 登
旧正先祖の笑ひ聞こほら三
夫婿揃った妹が笑ひ
速賀 長畑 房江
夜静か寝に近く水宿のほかに句
ひ雨の音す
小倉 大和 虎雄
肩の骨の一時におし心地し無
罪判罪の理由聴き取り
田熊 小野 花居
初春の四雀が明けそめて思
かに明日おろがむ
東郷 藤崎 辰子
街は早や影の望望の窓々
と風鳴の響
戸畑 田中ハツ子
救量量のサイレの音い早く
に入る外外外外外
神流 藤崎 俊
道されては待たざる成接龍
の小鳥は我によりか
福間 森 八蔵
拍手を打って祈りの漁夫の舟の
前の涙の涙
勝浦 永島 計七
女園に訪へど声は数珠のササテ
ン類奇しき花
大津 江崎 琴子
吹響て道も凍つて公園を眺
しめ走る若人
津屋崎 麦野 時雄
冬も風もあつた照る陽光を直葉
のごと全身に浴
福間 井原 元彦
折れかねる指をばはてはチチ
ユまで数をかきそ孫得意
田島 白雲 山人
酒やめて長生酒よりと思は願字
に交行の鶴とをまじし
戸畑 伊規須ゆき
山脈の迫れる勢の古きいづれ仙鶴
の海の香鮮し(依山温)の
若松 大高 岩吉
身体や智能正し使う程私共
神やまらん

春の曲線

「大なる願、天守より下界を掃いて、
「こまでも延び来る。その大地の中ほどに
神の所在を顕す千木、榊木がはるかに見
える。」
人々はこの下をたすむ時、心中に芸来
する来種を凡て昇華させる。そして
深くく願つたのである。この心の
営みは、太初初の方、民族に
与えられた木敷の姿となつて世
代から世へと受け継がれて
ゆく。」

この時、神はこの純無
二の祈りの上に加護を
垂れ給ふ。
互譲互助—それ
は神から人へ
の、そして人
と人の道
の曲線
である。



宗像大社奨学生 選定会開かる
— 詮衡基準は人物本位に —
昭和四十二年度宗像大社奨学生
受給生の選定会が去る二月十日
大社事務所に於て開催された。当
日、郡内六中学校校長を始め大社
から久保富司、係長が出席し
た。会議は先ず久保富司の挨拶に
始まり、係長より本年度の支給
額及び支給人員について説明があ
つた。完つて懇談会を行い、最終
この奨学金は皇太子殿下御成婚を
記念して始められたもので、郡内
六中学校の奨進学者を対象とし、
奨進され高校在学期間中支給され
るものである。発足より今日まで
の経過を顧みれば次の通りである。
先ず昭和三十一年より三十九年
までは各校より毎年一名の奨進生
を推薦しこれに対して年間一万二
千円の奨学金を支給した。昭和四
十年には人員倍額し十二名に對し
て同額の支給した。亦、その百
物備上昇のため若干の増額を予定
していたが四十二年度より受給

生には年額一萬八千円を支給する
ことと決定した。
受給生の中、更に上級学校へ亦
大社奨進と申した人々は、十八
名で時折よせられたる消息にも一
今後は宗像大社奨進生であること
を常時保持することと後述のため
にも一日も早く社会に貢献できる
立派な人物になる努力をして行
こうと思つています。一宗像勝也
君「私受けて来たの恩恵を

に先だち、中津宮に参拜、開発祈
願祭を行つた。翌日大雨にも
かかわらず、島内をめぐつて調査
を開始。以前にも調査された事
があり、今度二回目、島から産
出する玉石等、マルチグラス、
陶器等試作品が出来ており、原料
が豊富で、有望視されている。

阿蒙少言
貧窮流汗の身を起した太田秀
吉は、若い侍達の心理を觀察し
動向を察知して、濃霧の如く細
心の注意を怠らず智々偉業を進め
た。部下を知らぬ馬鹿殿は、い
乱麻の先は夢のまた夢。い
つ時代も先達指導者は最下の底
辺を知つて、金銭をまとめる頭
の機軸を回転させ、多数が構構す
る有機体の調調なる運営のため
に、構成員多数の幸福を争うた
に、〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇
事に対する積極的意欲が、下部に
浸透して、一歩一歩はカラ網り
や故隙が多く、発展性に乏しい。
高橋は低は不可、対流作用を起
てはならない、ましてや上層部
に遺憾不正があれば「源清からん
は源濁らず」の古語が訓を危
険が生まれる。統率者の英傑に期
待がかけられる所以〇不幸にし
て凶谷の戦に敗れて、系河原
に退却の節を踏した石田三成、そ
の若僧の愚昧の愚きに寺を助、そ
の若僧、最初の愚はあつた。二
杯目は熱熱一杯目は香高き湯湯
を飲し、誰の誰は偉傑の細眼に
登用された。後、佐和山の進軍四
万石、島左近という当代の達人を
召寄せたために、半分の二万石の
扶持を与えた。物を惜しむ人を
惜しんだ男子の心意氣、〇〇〇中
切りのつらなつた、と頭が孫を
追つて笑つ、食糧事情の悪かつた
当時の子供は、食へ物ありに機
體だつた。大津の巾着切りの意
で、孫は往々にして社会人の意
味を知つて其の物語、ほめられ
ていたと思ふ。今は事に機
體さ善い善い高しでしと願
〇併せて食物と高しでしと願
思ふ。問答を指した伊賀守、キ
ラ河に身を投じた辰原、朝に木蘭
の露を飲んで秋の落葉を食
ふの時、東洋古代の精神芳し
(白雲)

東郷 藤崎 辰子
街は早や影の望望の窓々
と風鳴の響
戸畑 田中ハツ子
救量量のサイレの音い早く
に入る外外外外外
神流 藤崎 俊
道されては待たざる成接龍
の小鳥は我によりか
福間 森 八蔵
拍手を打って祈りの漁夫の舟の
前の涙の涙
勝浦 永島 計七
女園に訪へど声は数珠のササテ
ン類奇しき花
大津 江崎 琴子
吹響て道も凍つて公園を眺
しめ走る若人
津屋崎 麦野 時雄
冬も風もあつた照る陽光を直葉
のごと全身に浴
福間 井原 元彦
折れかねる指をばはてはチチ
ユまで数をかきそ孫得意
田島 白雲 山人
酒やめて長生酒よりと思は願字
に交行の鶴とをまじし
戸畑 伊規須ゆき
山脈の迫れる勢の古きいづれ仙鶴
の海の香鮮し(依山温)の
若松 大高 岩吉
身体や智能正し使う程私共
神やまらん

論説 学歴と能力と勤怠

進学卒業と青年にとって生活の進路を決める
春はなつた。希望も多し反響も多かる
である。特に学歴は一生の進路を大きく左右
する。この大切な角に立って、処世の心構
えをどのように獲得して行くべきかを考へてみ
たい。

一度握つた学歴を、食つてゆく生活の具使
つて、大なり小なり権力の座に就いて、これを
濫用して行く役人や会社員が、あまりにも
多く自づと。学歴から社会へ立つ時は馬場
での頭落など思つてもいながら、ついに、修
練の途上に於ける境の変化が、無能や怠慢を
巧み隠して組織中に愉快する姿は冷然極
する。

「依頼の調査を僕が苦勞して結論を出し、
若し専門仲間から強い非難でも受けること
なたら、僕の地位は危くなる。何もせずの
ため、郷里の野に臥した。混乱期とは云へ、権勢
の椅子を売り物にして役人の下女な貪慾性が、
いかに世情の安定を見た今日でも、汚吏の良
心無性な厚顔無恥性を遺していることは、新
聞記者の絶えぬ問ふない事件の報が明かに物
語っている。

以上の例話の類は片はかりでなく会社その
他の組織にも少なくない。大学を出て一旦まく
月給増しと称する者が増えて手頃の枝にとまる
ものも、ついにまたとないことを起したがる。
ついにまたとないことを起したがる。
ついにまたとないことを起したがる。
ついにまたとないことを起したがる。

「復讐教材の特記の申請書はこんなものである
です。願を迫つて処理してゆくので、あ
なたは月先にならなからぬ。昭憲をか
まわず早急で審議する法もあるが、いくら出
ますか。これは既述の大蔵省での
話。役所の机の前で、幾百かの書類を山を指し
ながら役人は半ば公然と頭路を要求した。あ
る。この申請者は復讐教材の特記手続きを請
ね、郷里の野に臥した。混乱期とは云へ、権勢

無能怠慢に連る。何れも専攻と専攻に寄する
ところもなく、泰の宙中に須伝承の精神を
あつても言ふ。不公平平等と懸念は、如
格言だが、処世の妙諦の中にあつた。そして願
落目制目標車の心の中心に生きている。

格言だが、処世の妙諦の中にあつた。そして願
落目制目標車の心の中心に生きている。

格言だが、処世の妙諦の中にあつた。そして願
落目制目標車の心の中心に生きている。

格言だが、処世の妙諦の中にあつた。そして願
落目制目標車の心の中心に生きている。

格言だが、処世の妙諦の中にあつた。そして願
落目制目標車の心の中心に生きている。

格言だが、処世の妙諦の中にあつた。そして願
落目制目標車の心の中心に生きている。

格言だが、処世の妙諦の中にあつた。そして願
落目制目標車の心の中心に生きている。

